

平成22年 4月20日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520458

研究課題名（和文） 対面、遠隔、現地チュートリアル連携による中国語会話教育の高度化
 研究課題名（英文） The advancement of Chinese language education through the combination of the 3 types of tutorials: face to face learning, distance learning, and learning abroad tutorials.

研究代表者

村上 公一（MURAKAMI, Kimikazu）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：80210003

研究成果の概要：少人数中国語コミュニケーション能力開発プログラム（チュートリアル中国語）の(1)日本の教室での対面チュートリアル(2)日本の教室と中国・台湾の教室をインターネット TV 会議システムで結んだ遠隔チュートリアル(3)北京・台湾の教室で学ぶ現地チュートリアルの各形態のチュートリアルについて、授業の収録及び文字起こし作業を進めた。また、それらの分析結果を踏まえ、各チュートリアルを有機的に結びつけることによる学習のさらなる高度化を目指し、学習プログラムの改変を行い、あわせて新たな教材を作成した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	1,500,000	0	1,500,000
19年度	800,000	240,000	1,040,000
20年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,400,000	570,000	3,970,000

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：中国語、教育工学、外国語教育

1. 研究開始当初の背景

早稲田大学における少人数中国語コミュニケーション能力開発プログラム（チュートリアル中国語）は教室での少人数会話授業（チュートリアル）と学習支援 Web サイト（Tutorial Chinese HP）上での 4 種類の自己学習：①[予習ドリル学習]②[授業後の Tutor 報告（学習アドバイス）確認]③[復習ドリル学習]④[作文提出及び添削]及び受講開始前と終了後に受験する[中国語コミュニケーション能力判定テスト]からなる統合的学習プログラムである。本プログラムが、少人数会話授業として[対面チュートリアル][遠隔チュートリアル][現地チュートリアル]の 3

形態を同時に展開するもの他に類を見ない。しかし、3 形態のチュートリアル間の相互の関連付けについては不十分な点が残されており、3 形態のチュートリアルの有機的な結合を実現することにより、本プログラムを新たな次元に押し上げることが求められていた。

2. 研究の目的

少人数会話授業と IT 環境を駆使した自己学習空間とを連結させることにより、これまでにない高度な中国語コミュニケーション能力開発プログラムを創出するのが研究全体の目的である。具体的には、早稲田大学に

おける少人数中国語コミュニケーション能力開発プログラム（チュートリアル中国語）を調査対象とし、①日本の教室での対面チュートリアル②日本の教室と中国・台湾の教室をインターネットTV会議システムで結んだ遠隔チュートリアル③北京・台湾の教室で学ぶ現地チュートリアルの3形態の学習の質の相違と相互作用についての分析を行い、その結果をもとに、3形態のチュートリアルの有機的な結合の可能性を探ることを目的としている。

3. 研究の方法

(1)各形態のチュートリアルの特性分析

学習支援用の Web サイトを通して、現在までに約 1,000 名分の [予習ドリル] [授業後の Tutor 報告 (学習アドバイス)] [復習ドリル] [作文添削] [能力判定テスト] の各データが蓄積されている。このデータをもとに、①対面チュートリアル参加者、②遠隔チュートリアル参加者、③現地チュートリアル参加者に分けて、それぞれの特性を分析する。

(2)授業時の発話状況の録画と文字起こし

チュートリアル授業を録画し、授業中の発話状況を書き起こす。

(3)発話記録の分析

文字起こしデータに基づいた分析

(4)3形態のチュートリアルの関連付けについての再検討

(1)(2)の分析を踏まえ、3形態のチュートリアルの関連付けについての再検討を行う。

(5)新しいプログラムの試行と評価

(4)の検討を踏まえて新しいプログラムを試行し、その評価を行なう。

4. 研究成果

(1)研究期間である 2006 年度～2008 年度のチュートリアル中国語の履修者数は以下の通りである。

	06 前	06 後	07 前	07 後	08 前	08 後
準中(日)	61	34	55	42	57	43
準中(思)	27	29	41	36	44	31
中級(日)	37	35	49	38	41	35
中級(思)	26	36	16	29	25	30
中上(日)	21	17	11	9	7	13
中上(思)	21	18	8	11	17	5
上級(対)	34	27	7	10	5	12
上級(遠)	9	8	5	5	4	6
合計	236	204	192	180	200	175

表中の「準中」は「準中級」、「中上」は「中上級」、「日」は「日常生活」、「思」は「思考表現」、「対」は「対面討論」、「遠」は「遠隔討論」を指す。

毎学期約 200 名の学生がチュートリアル授業を履修している。これに加え、夏季到北京大学で、春季に台湾師範大学で実施される現地チュートリアルにも、それぞれ 20～30 名の学生が参加した。

これらのチュートリアルプログラムを調査対象とし、3で示した研究を行った。

(2)今回の研究での現地チュートリアルは、主に台湾師範大学での現地チュートリアルを対象とした。研究期間である 2006 年度～2008 年度の台湾師範大学での現地チュートリアルの履修者数は以下の通りである。

	男	女	合計
2006 年度	5	11	16
2007 年度	8	16	24
2008 年度	9	10	19

	前	後	前後	なし
2006 年度	4	2	6	4
2007 年度	5	15	0	4
2008 年度	3	7	2	7

下の表の「前」は現地チュートリアルの前のみ、「後」は現地チュートリアルの後のみ、「前後」は現地チュートリアルの前後ともに日本の教室でのチュートリアルを受講した人数。「なし」は日本の教室でのチュートリアルを受講しなかった人数である。現地チュートリアル参加者のうち 3/4 の学生が日本の教室でのチュートリアルも受講している。春季休業中に実施される台湾現地チュートリアルには卒業を目前に控えた 4 年次生も多く参加しており、これらの学生は現地チュートリアル終了後に、日本の教室でのチュートリアルを受講する機会はない。また、各学部での 1 年間の中国語基礎教育を受けた 1 年次の参加者も多く、これらの学生は現地チュートリアルの前に、日本の教室でのチュートリアルを受講することはない（チュートリアルは一定の中国語能力を持った学生を対象としている）。これらの学生の存在を考慮すると、現地チュートリアルは、日本の教室での対面、遠隔チュートリアルとしっかりと連携がとれていることが分かる。

(3)①日本の教室での対面チュートリアル②日本の教室と中国・台湾の教室をインターネットTV会議システムで結んだ遠隔チュートリアル③北京・台湾の教室で学ぶ現地チュートリアルの3形態のチュートリアルについて、授業の収録及び文字起こし作業を行った。特

に③の台湾での現地チュートリアルについて重点的に文字起こし及び整理を行った。これらのデータについては個人情報保護上の処理を施した上で公開する予定である。従来この種のデータは公開されておらず、今後の中国語習得研究のための資料として大きな価値を持つ。本研究期間において、のべ 21 時間分の授業収録データの文字化を終了している。

(4)2007年3月の実施の台湾での現地チュートリアルについては、これとは別に、参加者全員に「授業で学習したこと」「輔導で学習したこと」「校外学習や個人行動のメモ」「予習復習」「一日の反省、明日に向けて」の5項目からなる学習日記をつけてもらい、この日記と授業収録データを対照して分析することにより現地チュートリアル期間中に彼らに生じた変化を明らかにすることを試みた。

早稲田大学のチュートリアル中国語のクラス分けには、コンピュータ適応型テスト (Computerized Adaptive testing) による Web ベースの試験である TACC (Test of Ability for Chinese Communication) を利用している。台湾での現地チュートリアルの前 (1月末) のクラス分けのため受験の得点と、現地チュートリアル終了後 (3月末) に再度受験した得点とを比較すると、平均 16.8 点の増加となっており、現地チュートリアルに一定の成果があったことが確認できる。

学生	研修前	研修後	差
A	136	201	65
B	232	277	45
C	185	229	44
D	178	212	34
E	174	201	27
F	206	231	25
G	182	195	13
H	216	227	11
I	196	200	4
J	209	207	-2
K	224	221	-3
L	183	175	-8
M	198	161	-37
平均	193.8	210.5	16.8

しかし+65点から-37点まで、その増減の幅は100点を越え、現地チュートリアルの成果が学生によって大きく異なっていたことがわかった。そこで、大きく増減の異なる学生の学習日記と授業収録データの分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

①成績の向上が顕著であった学生は「教室学習」で学んだことをしばしば「教室外活動」で実際に使用し、同時に「教室外活動」での

成果や疑問点を「教室学習」に持ち込んで確認をしている。更にこのような「教室学習」と「教室外活動」を一連の学習として相互に結びつけるということを意識的に行なっていることも明らかになった。

②成績の向上が見られなかった学生はいずれも、少人数中国語会話形式の授業へのプレッシャーを他の学生と比べ強く感じていたことに加え、体調不良等により台湾での学習にスムーズに入っていけなかった。これらの学生は、日本でのチュートリアルの受講経験が無く、台湾現地チュートリアルがチュートリアル形式授業の初めての経験であった。帰国後に対面チュートリアルを受講しているが、帰国後のチュートリアルではしかるべき成果を上げている。

(5)台湾での現地チュートリアルでの成果を踏まえ、台湾師範大学の研究協力者が中心となり、現地チュートリアル用教材『青春遊學：日本人學華語』(林秀恵、信世昌編、遠流出版社)を編纂、出版した。このテキストは日本において一定レベルの中国語能力を獲得した学生が、台湾においてチュートリアル形式の短期集中授業を受けることを想定しており、「対面チュートリアル」→「現地チュートリアル」の移行をスムーズに行えるような構成、内容になっている。目次は以下の通り。

- 第一課 歡迎到台灣來!
- 第二課 你的興趣愛好是甚麼?
- 第三課 今天要吃甚麼?
- 第四課 去哪裡買衣服比較好?
- 第五課 台北的天空
- 第六課 我的肚子痛死了!
- 第七課 先生, 不好意思, 請問一下...
- 第八課 聽說太魯閣的風景美不勝收
- 第九課 我們過去請他們喝一杯吧!
- 第十課 我們會再回來的!

(6)対面チュートリアルについてもテキストの全面見直しを行い、『快樂学漢語・說漢語 - 準中級中国語会話』『快樂学漢語・說漢語 - 中級中国語会話』『快樂学漢語・說漢語 - 中上級中国語会話』の三冊として出版した。

いずれもチュートリアル学習をスムーズに行えるように、学習内容の明示化を行った。また、中国語が大陸簡体字のみではなく香港、台湾の繁体字もあることを意識させるため、各課の新出単語に繁体字を併記した(本文は簡体字のみの表記だが、香港・台湾で別の語彙を使用している場合は注記を施した)。このことにより、対面チュートリアル学習者が台湾現地チュートリアルに参加する際の文字・語彙上の障害を部分的ではあるが取り除くことができた。三冊の目次は以下の通り。『快樂学漢語・說漢語 - 準中級中国語会話』

- 第一课 坐地铁
- 第二课 拜访
- 第三课 租房
- 第四课 登机
- 第六课 住宿
- 第七课 买东西
- 第八课 谈爱好
- 第九课 打工
- 第十课 考试

『快樂学漢語・説漢語 - 中級中国語会話』

- 第一课 演唱会
- 第二课 大学生活
- 第三课 北京和上海
- 第四课 高考
- 第六课 请客
- 第七课 教育
- 第八课 结婚恋爱
- 第九课 春节
- 第十课 找工作

『快樂学漢語・説漢語 - 中上級中国語会話』

- 第一课 互联网
- 第二课 中华街
- 第三课 海归
- 第四课 城市与农村
- 第五课 鲁迅
- 第六课 台湾的夜市
- 第七课 跳槽
- 第八课 情人节
- 第九课 台湾的哈日族
- 第十课 中日关系

(7)上級チュートリアル(対面、遠隔)についても内容を全面的に再構成した。オンデマンドシステム上で事前に中国語による講義を聞き、その講義内容もとに2回のチュートリアル授業を行うこととした。1回目は講義内容の確認及び講義の中で用いられた中国語表現の確認。2回目は講義内容を踏まえたプレゼンテーションとディスカッションとした。中国語による講義の題目は以下の通り。

- 「金庸武侠小说的世界」
- 「中国古典诗歌的世界-唐诗欣赏」
- 「日本学生常见的汉语用法偏误」
- 「中国流行音乐三十年」
- 「唐人街与中国菜」
- 「中国女书」
- 「中国电影简史」
- 「中国的环境与可持续发展」
- 「中日近代新词的相互影响」
- 「中日关系中的历史问题」
- 「中国的网络言论和“反日”游行」
- 「中国大陆、台湾及日本三地的贸易关系」
- 「改革开放后中国非公有制经济的发展」
- 「中国的知识产权保护」
- 「中国国有企业的改革」
- 「中国近代史入门」

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

- 1.茂木良治、村上公一他、外国語教育におけるブレンディッドラーニングの実践報告、早稲田教育評論、23/1,2009,19-32、学内査読
- 2.村上公一他、英語以外の外国語教育の情報化(2)、早稲田教育評論、22/1,2008、169-180、学内査読
3. Wang yu, Sunaoka Kazuko, Murakami Kimikazu, Exploring the Model of Distance Chinese Language Teaching and Tutorial Chinese Advanced Course, Cross Cultural Distance Learning Teachers' Manual, 1、2006、73-94、査読無

〔学会発表〕(計 1件)

- 1.村上公一、短期語学研修における学びのメカニズム-学習日記の分析を通して-、日本中国語学会第58回大会、2008年10月26日、京都外国語大学

〔図書〕(計 3件)

- 1.村上公一(監修)、王俊毅、江秀華(執筆)、快樂学漢語・説漢語 - 準中級中国語会話、早稲田総研インターナショナル国際コミュニケーション事業本部、2009、146
- 2.村上公一(監修)、王俊毅、江秀華(執筆)、快樂学漢語・説漢語 - 中級中国語会話、早稲田総研インターナショナル国際コミュニケーション事業本部、2009、156
- 3.村上公一(監修)、王俊毅、江秀華(執筆)、快樂学漢語・説漢語 - 中上級中国語会話、早稲田総研インターナショナル国際コミュニケーション事業本部、2009、144

〔その他〕

*海外研究協力者による図書

- 1.林秀恵、信世昌(編)、青春遊學：日本人學華語、遠流出版社(台湾)、2009、156

6. 研究組織

(1)研究代表者

村上 公一 (MURAKAMI, Kimikazu)
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：80210003

(2)研究分担者

無し

(3)連携研究者

無し